

## 《秋田県横手市》

人口 (H29.3.31 現在) 92,422人 面積 692.80 km<sup>2</sup>

### 【市の概要・歴史】

横手市は、秋田県南部の奥羽山脈や出羽丘陵などに囲まれた横手盆地の丘陵地にあり、市内には雄物川や横手川が流れ、美しい田園風景が広がる日本でも有数の穀倉地帯です。

気候は四季の変化に富み、多様な作物の生育に適しています。また、冬の伝統行事「かまくら」に象徴されるように、日本海側有数の豪雪地帯としても知られています。

古くは旧石器時代からの遺跡が数多くあるほか、中世には武士の台頭を予感させる「後三年の役」の舞台になるなど、歴史上重要な出来事が起こりました。江戸時代には秋田藩（佐竹氏）の南部における交通の要衝として商業面でも大いに栄えました。

平成17年10月1日、近隣8市町村（横手市、増田町、平鹿町、雄物川町、大森町、十文字町、山内村及び大雄村）が合併し、秋田県第二の人口規模となりました。

### 【「食と農からのまちづくり事業」について】

#### （1）視察の目的

横手市は、農業を基幹産業に発展しており、全国生産量第2位の「あきたこまち」や全国有数の生産量を誇るホップをはじめ、アスパラガス、しいたけ、りんご、もも、すいか、ぶどうなどの生産量は県内一を誇ります。一方、昔から麴発酵文化が根づいており、麴漬けの漬物をはじめ、味噌・醤油の醸造や甘酒など、発酵食を生かした食文化や産業が形成されており、平成20年3月に「全国発酵食品サミット in 横手」が開催されました。

このような地域の基幹産業である農業や食文化を核に新たなまちづくりを巻き起こそうと、「食と農からのまちづくり」が進められています。

今回は、事業を始めた経緯のほか、事業内容及び効果、課題等について視察するものです。

## (2) 視察の内容

横手市は、秋田県全体として稲作農家が多いですが、横手市は古くから果樹や露地等野菜を中心とした生産農家が多く、農林水産省の平成27年の調査では266億9,000万円の農業産出額を誇ります。また、麴を中心とした発酵文化が根付いており、日本酒を初め、味噌、醤油や、秋田を代表する漬物であります、いぶりがっこが生産されています。

主な生産品目は大根(郷土食の「いぶりがっこ」の原材料となる)、里いも、ぶどう、りんご、さくらんぼ、花卉、すいか、菌床しいたけ、枝豆、ホップ(キリンビールとの契約栽培で全国トップレベル)です。

課題は担い手の高齢化、減少のほか農産物の価格の低迷・資材費などが高くなっており、収



益が非常に低下しているほか、ここ数年、毎年大雪で果樹を初めさまざまな農産物・施設に被害があり、産業としての活力が下がってきているほか、若者が農業に乗り出してきてくれない、条件が不利な中山間地域なので、耕作放棄地も多発してきている現状があるとのことです。

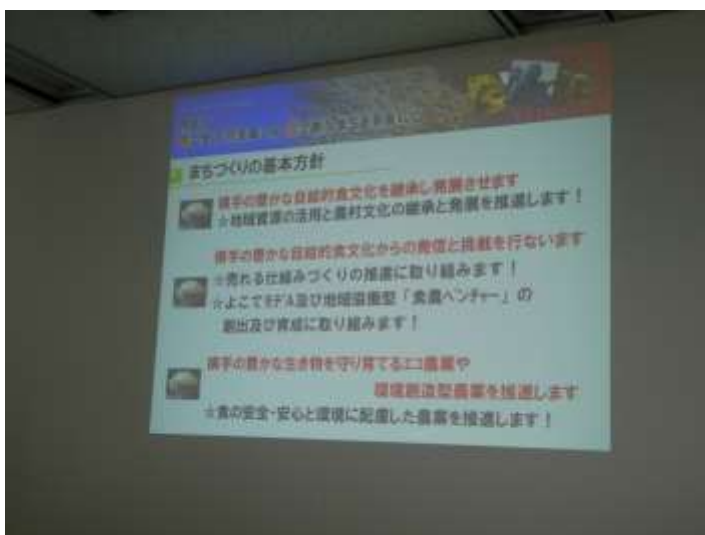
こうしたことから、横手市では担い手農家への支援として、施設・機械整備等への支援をし集積を行ってきました。新規就農者をいかに取り込んでいくかが最大の課題と考えており、農業者の所得向上策として、平成27年度からよこて農業創生大学事業を始め、去年は2名、今年4名の実習生が学んでいます。横手市実験農場という市の施設を活用し新規就農者への支援等も行っており、それを更に強化し、確かな栽培技術や優れた経営感覚を持った農業者を育てることを目的に事業を始め、現在、施設等の整備に入っているとのことです。

また、平成26年度から農地バンクを通しての集積を進めており、ここ3年で1,630ヘクタール完了し、今年度も300ヘクタール程度行うことで進めているそうです。集積が進む中課題となるのは、条件が不利な土地の出し手が多いが、買い手が少ないのでマッチングが取りづらくなっており、いかに使

える土地に変えていくかが課題とお聞きしました。

「食と農のまちづくり事業」は、「食に学び、食を楽しみ、食で潤うまち」をキャッチフレーズとして目指しており、平成19年度から始まった事業で、市町村合併時、新たな横手市の共通の財産とは何かを考えた時、「農業」と「食」というものが出てきた。農業と食を通じてそれに関わる産業を元気にしていこうと始まった取り組みです。

食育活動や食文化の継承、ブランド化、農業所得の向上を図るため、産業経済部にマーケティング推進課が設立され、取り組みが進められてきましたが、平成27年度の組織替えにより食育、ブランド化については農林部農業ブランド創造課、販売活動・商品PRについては商工観光部横手の魅力営業課に分担して進めています。



「食と農のまちづくり」のコンセプトとして、共通財産である「食と農」を最大限生かしてまちを元気にしていこう、という考えの下取り組んでいます。

まちづくりの基本方針として、①横手の豊かな自給的食文化の継承・発展、②横手の豊かな自給的食文化からの発信と挑戦、③横手の豊かな生き

ものを守り育てるエコ農業や環境創造型農業の推進の3つを掲げています。

横手の豊かな自給的食文化の継承・発展の具体的な取り組みとして、横手の豊かな自給的食文化の継承・発展として、食育の推進、地産地消に関するレシピの発信、給食への横手産食材の導入、農産物加工品の研究、食文化の掘り起こしなどを行っており、また、横手の豊かな自給的食文化からの発信と挑戦として、首都圏や関西圏へ出向きマーケティングを兼ねた直売、売れる仕組みづくりへの取り組み、よこてモデル及び地域協働型食農ベンチャーの創出及び育成への取り組みとして、食と農に関する産業を食農ベンチャーとして位置付け、次世代の産業として育てていくなど、多様な取り組みを行っています。

「食と農のまちづくり事業」のこれからのについては、これらの事業を継続し横手市が食の供給基地としての役割を果たすことにより、食を通じて全国に元

気を届けより魅力のある市を目指していくとのことでした。

## 【「道の駅十文字」について】

### （１）視察の目的

横手市（旧十文字町）に位置する道の駅十文字は平成19年9月に開業し、農産物直売施設、農産物加工施設、レストラン、ファーストフード、交流・休憩ホール、道路情報提供施設、コンビニエンスストア（24時間営業）、観光・行政サービスコーナー、芝生広場を有しています。秋田県内の道の駅でもトップの売り上げを誇り、平成27年の農産物直売施設の売り上げは過去最高の約4億5800万円に上ります。さまざまな新商品が好評を得て売り上げ増を後押ししました。

今回は、道の駅における経営手法や集客方法、課題等を調査するため視察するものです。

### （２）視察の内容

道の駅を運営する会社「㈱十文字リーディングカンパニー」は純民間会社として設立したもので、代表は旧十文字町長の小川健吉氏が務めています。



横手市の南の玄関口に位置しており、今年で開業10周年を迎えました。モノを売る、買うよりも前に、道の駅に入ってほっとする、やすらぎを提供することを第一に考えた経営方針を打ち出しており、収支は黒字で経営しています。東日本大震災の前年がピークで、年間72万人が訪れていましたが、現

在は60万人程度であります。売り上げは入込客数に反して伸びているとのこと。

売り上げが伸びている要因として、開業2年目から行っている外販が伸びていることから、現在、秋田市、仙台市、首都圏で展開しているそうです。外

販をすることによって経費はかかるが、トータルで黒字経営であればそれによいと考え実施しているとのことでした。

施設管理について、業者委託は一切行わず、スタッフがトイレ、フロア掃除からゴミの廃棄等まで行っています。徹底した経費削減によりスタッフへのボーナス等の支給も行っているそうです。



## 《山形県鶴岡市》

人口 (H29.3.31 現在) 129,323人 面積 1,311.53km<sup>2</sup>

### 【市の概要・歴史】

鶴岡市は、平成の大合併により人口では山形市に次ぐ県内第2位、面積では東北第1位で、庄内地域の南部に新潟県に接して位置しています。市の東部から南部にかけて磐梯朝日国立公園に抱擁される出羽丘陵、朝日連峰、摩耶山系の山岳丘陵地帯が広大な森林を抱えて広がっており、市域の70%を占めています。また市の北西部には庄内平野が広がり、はえぬきやつや姫などが生産される国内有数の米どころとして知られています。庄内平野の西部は日本海に面しており、約42kmにわたり海岸線、海浜、砂丘等美しい景観を望むことができます。

庄内地域の政治、経済、文化の中心都市として栄えてきた鶴岡市は、江戸時代は譜代大名の酒井氏が治める庄内藩の城下町で、市中心部には鶴ヶ岡城址をはじめ国指定指定史跡の藩校致道館などがあります。

### 【「ユネスコ食文化創造都市の取り組み」について】

#### (1) 視察の目的

鶴岡市は、山・平野・川・海を有し、四季折々の豊富な食材に恵まれ多様な食文化を楽しむことができる。このことを背景に、平成26年12月に日本で初めてユネスコの「創造都市ネットワーク」食文化分野での加盟が認定されました。ユネスコが認める世界の食文化創造都市として、ネットワークを通じた国内外の創造都市との交流を行うとともに、鶴岡食文化を世界に向けて強力に情報発信することにより、訪日外国人旅行者の誘客促進、交流人口の増加や各種の文化・産業活動の活性化に向けた施策を積極的に展開しています。

今回は、事業の経緯のほか、事業内容及び効果、課題等を調査することを目的に視察するものです。

#### (2) 視察の内容

鶴岡市は、出羽丘陵、朝日連峰から庄内平野、日本海と広大な市域の中で、

海の幸・山の幸に恵まれた豊かな食文化を有し、また1400年以上にわたり信仰を集める山岳修験の聖地であります、出羽三山における精進料理など、精神文化と結びついた独自の食文化が残っております。

また、鶴岡市には数百年にわたり種を守り継いできた在来作物が50種類以上残っており、その栽培方法とともに継承されています。

そして、山形大学農学部を始め慶應義塾大学先端生命科学研究所、鶴岡工業高等専門学校など、高等教育機関が集積する地でもあります。

こうした歴史や食文化等を背景に、地域固有の文化の多様性の保持、文化を生かした創造的産業・経済の創出による地域文化の維持発展と国際的な相互の協調、食を生かした地域づくりを目的に、平成23年7月に産業界、大学、有識者、市民団体、行政で構成する鶴岡食文化創造都市推進協議会が設立されました。

協議会では、食の祭典の開催やフード・ツーリズムの振興、食育・地産地消の推進等、食文化創造都市推進事業の実施に取り組む一方で、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の「創造都市ネットワーク」食文化分野での加盟を目指し活動を進め、平成26年12月、ユネスコより食文化分野での創造都市ネットワークへの加盟が認定され、日本で初のユネスコ食文化創造都市となりました。



ユネスコ食文化創造都市の認定の効果として、食文化を通じて世界とのパイプが生まれたほか、大きな事業としてミラノ国際博覧会への市単独出展、インバウンドプロモーション事業など、食を通じて海外からの誘客促進策を積極的に進めているとのことでした。

また、昨年度農林水産省が創設した制度である、食と農の景勝地に鶴岡市の「ユネスコ食文化創造都市で体感する食と風土」が認定され、訪日外国人旅行者の観光ルートとして、積極的なPRを行い、鶴岡市の地域産業全体の活性化につなげていきたいとお聞きしました。

今後の取り組みとして、食文化を生かした観光誘客の更なる推進を図るため、「世界から食を楽しみ、学びに訪れたくなるまち」を目指し、地域全体を一つの博物館と見立てた「鶴岡ガストロノミーフィールドミュージアム構想」を推進し、食文化をメインテーマとした農林水産物や風土を体験する取り組みを展開するなど、国内外からの誘客強化を図っていくとのことでした。

また、ユネスコ食文化創造都市や国内外の食の教育研究機関との連携を推進し、国際カンファレンスや食のフィールドスタディツアー等を開催するなど、定期的に外国人が訪れる機会を創出する事業を展開し、東京オリンピック・パラリンピックをターゲットとした誘客促進も図っていきたいとお聞きしました。



## 《新潟県新潟市》

人口 (H29.4.1 現在) 803,401人 面積 726.45 km<sup>2</sup>

### 【市の概要・歴史】

新潟市は古くから港町として栄え、江戸時代から物流拠点、新潟湊の機能を生かして賑わいを見せており、安政5年にアメリカ・イギリスなど5か国との修好通商条約によって、函館・横浜・神戸・長崎とともに開港5港の一つに指定され、世界に開かれた港町となりました。明治22年の市制施行以来、近隣市町村との合併によって人口が約81万人となり、平成19年4月1日には本州日本海側初の政令指定都市となりました。

高速道路網や上越新幹線により首都圏と直結しているなど、陸上交通網が充実しているほか、国際空港、国際港湾を擁し、国内主要都市と世界を結ぶ本州日本海側最大の拠点都市として高次の都市機能を備えています。一方で、広大な越後平野は、米のほか、野菜、果物、畜産物、花き類など、農畜産物の一大産地です。また、日本海側に面し、信濃川・阿賀野川の両大河、福島潟、鳥屋野潟、ラムサール条約登録湿地である佐潟といった多くの水辺空間と里山などの自然に恵まれています。

### 【「鉄道のまちづくり」について】

#### (1) 視察の目的

新潟市（旧新津市）は、平成26年7月にリニューアルした市が運営する新津鉄道資料館と地元商店街等との連携により、明治時代からの歴史的な背景を活かし、かつては「西の米原、東の新津」と呼ばれるほどの鉄道の要衝であった『鉄道の街』としてのイメージを確立するため、ユニークなハード・ソフト事業を実施し、多くの来街者を集めています。

今回は、鉄道のまちづくりに係る経緯のほか、事業内容及び効果、課題等を視察するものです。

#### (2) 視察の内容

新潟市（旧新津市）の鉄道の歴史は、明治30年、北越鉄道の新津駅が開業

したのが始まりとされ、明治45年には、現在の信越本線、磐越西線、羽越本線が交差する鉄道の要衝となりました。

その後、昭和16年には新潟鉄道局の車両工場である新津工場が設置され、さらに昭和30年代前半までに機関区や車掌区、電力区など15の機関が設置され、4人に1人が鉄道関係の仕事に従事し、「鉄道の街にいつ」の全盛期を迎えました。

しかし、昭和40年代に入ると車社会への変革や鉄道の近代化が進み、鉄道の実質的な機能や業務は新潟駅に吸収されていきました。

このような鉄道要衝地として栄えた新津に、市民の間から「歴史を後世に残したい」「新津に鉄道博物館を」という声上がり始め、昭和58年に新津鉄道博物館がオープンしました。

その後、新潟市との合併を経て、「鉄道の街にいつ」の中核施設として地域の 鉄道の歴史、歩み、発展、時代の変化などを考慮し、さらにJR東日本などの全面支援により200系新幹線、C57型蒸気機関車などをはじめ、実物の資料展示を行うことで鉄道文化をわかりやすく表現することを目的に、平成26年にリニューアルオープンしました。また、ことし6月にはM



a xときなどの愛称で上越新幹線を走る2階建て車両「E4系」などの車両をJR東日本より有償で譲り受けたとのことで、その搬入作業の様子を収録したDVDを視聴し、また実物車両を視察しました。

リニューアルの基本的な考え方として、資料館を新潟市独自の文化施設として再生し、その魅力を内外に発信することで人々が集い、交流することにより地域の活性化を目指すほか、鉄道のまちの記憶を再発見するとともに、最新技術を含めた新たな資料を収集し、わかりやすい展示を行いながら、新津をはじめとした鉄道文化の魅力発信、鉄道文化を継承・発展する人づくりと、地域・市民・企業との連携により、魅力ある事業の展開を図るなど、鉄道の街のイメージづくりと地域協働を進めているとのことで、特に、資料館の発展は地域の

発展であり、また、地域の発展は資料館の発展と考え、地域貢献・相互連携・協働が今後の鉄道博物館運営におけるキーワードになると話されていました。

こうした中で「鉄道の街にいつ」のイメージづくりに取り組んでおり、リニューアル時のマスコミの取材記事には「鉄道の街にいつ」を入れてもらい、県



内最初の鉄道の街としてのイメージ発信、定着を図ったことや、商店街組織の理事会に職員が参加し情報交換を行うなど、無理のない持続的な活動をすることで地元新津の住民への「鉄道のまち」の意識づけが図られたほか、商店街が独自に鉄道のまちとしての事業に取り組んでいるとのことでした。

また官・館・民一体でも事業を実施しており、地元商店街では組織化を図り実行員会を結成し定期会議を開催しているほか、商店街の空き店舗を活用した鉄道資料の展示、グッズ販売やJR東日本新潟支社や新津駅と協力関係による宣伝など、連携事業での相乗効果が生まれているとのことでした。